

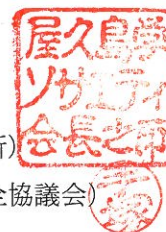
2015年2月2日

新高塚小屋 TSS 式トイレについての要望書

屋久島学ソサエティ

会 長 湯本貴和 (京都大学霊長類研究所)

副会長 手塚賢至 (屋久島生物多様性保全協議会)



屋久島学ソサエティは 2013 年 12 月に島内外の多くの賛同人を得て設立されました。屋久島の地域住民とさまざまな分野で屋久島に関わる研究者・専門家が協働して新しい屋久島学を築き、地域が抱える諸問題の解決への貢献を目指しています。

昨年 12 月の第 2 回大会のなかで、今回の要望書に係る「山のトイレを科学する」と題したテーマセッションを開催しました (添付資料)。観光や登山に関する自然の適正利用についての客観的な見地からの検討を行い、今後屋久島の山岳トイレはどのようにあるべきか、その課題について提起することを開催の趣旨としました。セッションでは、これからの屋久島の自然利用施設のあり方について、民・官・学が協同して知恵を出し合い、解決への提案・方向性を導き出すべきであるという議論がなされました。特に使用不能状態にある新高塚小屋の TSS 式トイレの現状と対策には、このシステムに精通した専門家をコメンテーターとして招き、地元のガイドを中心とした関係者を交えて、問題点と解決策への可能性について理解を深めました。

屋久島学ソサエティでは今後、この「山のトイレを科学する」というテーマを屋久島の観光や生態系保全の重要な課題として位置づけ、引き続いて屋久島の山岳トイレのあるべき姿への検討を進め、問題解決へ向けた協力を惜しまない所存です。

現在、屋久島学ソサエティのテーマセッションを契機にして屋久島の山中で実際に客人を案内してトイレを利用するガイドの有志の中から、屋久島の山岳トイレの課題に積極的に取り組む機運が高まりつつあります。こうした地元の動向を踏まえ、屋久島学ソサエティでは新高塚小屋 TSS 式トイレについて、以下のように要望いたします。

- 1) 新高塚小屋に設置されている現在、使用不能状態の TSS 式トイレの再運用を目指して可能な限りの手立てを施すこと。
- 2) そのためには少なくとも 1 年間の猶予期間を置いて検証・調査を実施し、この間に使用不能に陥った原因の解明と再起動の可能性を追求すること。
- 3) この取り組みには TSS 式システムに精通した専門家の参画を求め、現場の利用実態や自然環境を理解し、主体的に取り組む意思を持つ地元のガイド等との協力体制を築くこと。

新高塚小屋の TSS 式トイレの検証・調査によって、今後の山岳トイレのあり方を考えるためにさまざまな有用なデータと経験が得られます。拙速に撤去するのではなく、以上の 3 点を実施されるように屋久島学ソサエティとして要望いたします。また、このトイレ建設には公共工事として多額の資金が投入されています。国民への説明責任の観点からも十分な検証を行い、そのうえで納得できる結論が示されることを望みます。